

高山の文化を高めた人々 〈5〉

宿命の版画家 守洞春とその周辺

中野幸斎

守洞春先生が亡くなられてから早いもので、今年で満十年になる。

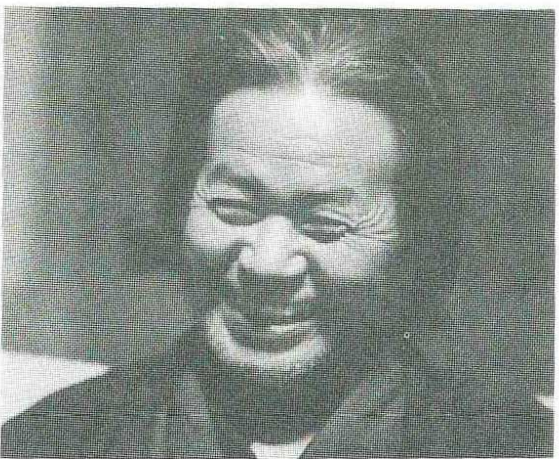
先生が高山西尋常高等小学校の頃、図工の時間で「朝日に海」の年賀状をボール紙に彫ったのが版画の初めで、その他「こまどり」のカットなどを版画にされた。その当時は洋傘の骨を砥いだものと、切り出し小刀で彫り、これが版画へのきっかけとなり、やみつきともなっていた。以来、版画一筋の人生を歩むことになられる。

この欄でも紹介されたが、武田由平先生、間吉三郎先生が飛驒版の生みの親とすれば、守洞春先生は飛驒版画を大きく発展させ、全国的にも有名にされた育ての親と云える。

昭和十九年、郷里の高山に帰られてから、昭和二十年代には飛驒地区の小中学校で版画制作の講師をつとめられ、又、全日本年賀状版画コンクール中部地区審査員をされるなど、版画教育の面でも大きな貢献をされた。昭和四十七年、岐阜日日新聞社から「教育文化賞」を受賞されたが、その時のテーパーライブラリーの中で「版画制作は私にとって宿命的なものであり、

人間探究の道である」と語られている。まさに、宿命の版画家といえよう。

戦前、東京に住んでみえた頃恩地孝四郎のところで、関野準



一郎、山口源を中心に毎月第一木曜日に集まって研究雑談する「一木会」が発足するが、守先生も会員として加わり戦後へと続く。その間、川上澄生・前川千帆・平塚運一・棟方志功など日本を代表する木版画家との交遊があり、話の中でも、これらの人達の名前がよく聞かれた。先生は、棟方志功が主宰する日本版画院や、日展系東光会の委員として所属され、高山とも縁のある芸術院会員の森田茂氏ともかわりが深かった。

昭和三十六年の日展特選作「室生寺」は洋画部門の中に

あって版画としては棟方志功に次ぐ二人目の快挙で、守洞春の名を一躍、全国的なものとなされた。又「室生寺の雪」は海外にも渡り、高い評価を受けられた。

高山では、守先生を中心に版画の仲間で「飛驒版の会」ができたが、同人は現存の岩島周一・船越山治、柚原博明・岐阜の大野美義の各氏と私で、高山や岐阜で度々「守洞春と飛驒版画展」を開き好評であった。

同人の中でも船越氏は、守先生が千光寺にある会館の襖に「龍と飛驒八景」の墨絵を描かれた時、一週間ほど通ったり泊まったりしていろいろな手伝いをするなど助手的な大事な人であった。

守先生の遊び心は「遊戯三昧」の言葉にも現れているように、よく人を集めては盃を酌み交わし、楽しむ企てをされた。

ある時期、本教寺での「新年描き初め会」などもその一つだが、いつも三十数名の人が集まり、その顔ぶれも版画の同人・日本画・書・陶・写真の方々や、若い人たちも加わって実に多彩であった。

守洞春先生のお墓は、法華寺の墓地を登りつめる少し手前の加藤歩簾の道標を左へ約五〇ほど入った所にある。墓は自然石で「寂光」という文字が刻まれている。